



煙突に願いを



いちは

子どもの頃、クリスマスなんて大嫌いだった。
家には煙突がないから、サンタは来ない、来れない。
両親からは、そう説明された。
団地に住んでいる友人たちには、クリスマスプレゼントが届いていた。
煙突なんてないのに。
だから、サンタクロースなんて作り話。
小学校一年生で、俺はそう思うようになっていた。

しかし、である。
作り話だと分かっているけど、やっぱり、なぜか、煙突が欲しかった。
煙突さえあれば、サンタさんが来てくれる。
本当は、作り話なんかじゃないのかもしれない。
心のどこかに、そういう期待があった。
恥ずかしい話、十八歳で家を出るときも、その期待だけは残っていた。
そして、将来は煙突のある家に住みたい、そう思うようになっていた。

大学に入って最初のクリスマス・イブ。
俺はクラスの独り者グループと酒を飲んだ。
男も女も数人ずつ。
話題がサンタになった。
俺は、煙突のある家に住みたいことと、その理由を話した。
友人たちには笑われた。
そんな中で、一人だけ、真剣に聞いてくれた女の子がいた。
それが、カオルだった。

飲み会の帰り道。
カオルと二人きりになった。
「煙突があれば、きっとサンタも来てくれるさ」
白い息を吐きながら、カオルが言った。
ショートカットのカオルは耳がむき出しで、寒さのせいかわたぶが赤かった。
少し酔った頭で、俺は煙突のある家を想像した。
煙突は、レンガ造りが良い。
できれば、家だってレンガ造りが良い。
暖炉、ロッキングチェア、クリスマスツリー。
期待と不安を胸に、枕もとに靴下を置いて眠りにつく。
「じゃ、またね。来年もクリスマスしようね」
俺の空想をさえぎって、カオルは自分の家の方向に歩いていった。

翌年の十二月二十四日は、生まれて初めて女性と二人きりで過ごすクリスマスだった。
向かいに座っているのはカオル。
近所の小さな居酒屋だったけれど、クリスマスの飾りつけはきれいにしていた。
小さなシャンパンを注文した。

「メリー・クリスマス」

店のアクリルだかガラスだか分からないグラスで乾杯した。

「音が安っぽいな」

俺は照れ笑いしながらシャンパンをぐいと一口。

「そう？ 良い音。わたしは好きよ」

カオルが微笑んだ。

帰り道。

一年前のクリスマスよりも寒く、手袋をしていても手がかじかんだ。

隣には、ショートカットのカオル。

耳たぶが赤い。

ふと、去年も同じような感じだったなと思い出した。

「さむっ」

カオルが両手を口の前に持って行って息を吹きかけた。

俺は左の手袋をはずして、カオルにあげた。

「サンキュー」

左手に手袋をはめたカオルは、右手で俺の左手をとった。

つないだ手は、手袋をしている手よりも温かかった。

初めてカオルの部屋に入った。

想像していたより狭く、予想以上に片付いていた。

二人でコタツに入って、テレビを見ながらビールを飲んだ。

自然と、手をつないでいた。

「キスして良い？」

カオルが、あごを突き出すようにしてうなずいた。

歯がぶつかるようなキスをした。

シャンパンの乾杯を思い出した。

電気を消した。

出窓に置かれた小さなクリスマスツリーが点滅している。

電球の灯りを受けて、カオルの目に映る俺の顔が浮かんでは消えてを繰り返した。

もう一回キスをした。

今度は、なるべく、ゆっくり。

自分の緊張が恥ずかしくて、それを悟られたくなかった。

好きだよとか、愛しているとか、なにかそういうことを言いたかった。

だけど、ガツガツしているとは思われなくなかった。

もっと先に行きたいとか、セックスしたいとか、そんなことは考えていないよ。

そういう余裕の態度を見せたかった。

「煙突さえあれば、サンタが来てくれるんだけどな」

どこか間の抜けたセリフに、カオルは笑って頷いてくれた。

「大丈夫、サンタさん、今年は来てくれるよ」

カオルは、優しくそう言うと指さした。

カオルの指の先。

俺の下半身に。

煙突が立っていた。